

月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

5-13

「すまない、何もきかないで、しばらくそのままいてほしい」と横田は真紀に頼み込んでから、いつの間にか用意していた画帳を広げると、何かに取り憑かれたようにヌードデッサンを始めた。

高級クラブのママとして多種多様な人種を相手に立ち回ってきた真紀は、突拍子もない未経験のハプニングにも面食らったのは数分だけだった。

画家はポーズを指示することもなく、数枚のデッサンを一気に描き上げた。

その並はずれた集中力は、天性の希有な才能を彷彿とさせた。

「腹が減った……」と横田は、眼前に起こっている状況に臆することなく訴えた。

火照りの余韻が燻る裸体にレースガウンを羽織った真紀は、ロフトのこじんまりした水屋で夕食の残りのローストビーフと横田の朝食には欠かせないアルサスローレン上野松坂屋店のパリジャン(フランスパンの種類)でワサビ入りオニオンソースと香味野菜を使ってパリジャンサンドイッチを作った。

「イケるね！」と横田パリジャンサンドを頬張りながら言った。既にロフトには閨事の気配は霧消していた。

「まさかこんな感じでこうなるとは……」と真紀は声を揺らして言う前から、三本のローソクの火を吹き消すと、レースガウンを着けたままベッドに横たわる。

横田は杉皮和紙のスタンドライトをつけるとワインセラーの脇にある冷蔵庫からキリンビールが国内生産をしている350ミリリットルのバドワイザーを二缶取り出してきた。ベッドに横座りになってプルトップを開けた横田は、もう一缶を真紀に手渡してから、「こんな時は、なんとってビールだね！」と言って、喉を鳴らしてうまそうに飲んだ。

「裸を描くのは初めてなんだ」と画家はモデルに、照れくさそうに語りかける。

「旅の途中で放り出されたのは、私も初めてよ」とモデルはエスプリを利かせて応じた。

「この次は、間違いなく旅の終わりまで案内するよ」と画家は笑みを浮かべて返答する。

「ねえ、終わりまでは何本の筆を使うの？」モデルは冷笑の前触れを口元に隠し、第二弾のエスプリを利かせて尋ねた。

「かなわないなあ！今度は片手に三本持って楽しませてあげようじゃないか……」と画家は困ったふりをして大げさにぼやくと、軽くジャブを入れながら、レースガウンの上から女体に左手を這わした。